

県道山賀一守山甲線単独工事に伴う
遺跡発掘調査報告書

— 大門遺跡 —

1983

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

県道山賀—守山甲線単独工事に伴う
遺跡発掘調査報告書

——大門遺跡——

1983

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

00/1.2
p. 27

序 文

近年の交通機関の発達には目まぐるしいものがあり、それにつれて幹線道路の整備も各地で行なわれています。山賀一守山甲線単独道路工事もそのような工事の一つです。

本調査は我々の祖先の営みの跡であった大門遺跡の一部を工事関係者の協力と理解を得て工事に先立ち実施した発掘調査であり、本冊子はその遺跡の記録を保存したものであります。これが今後、文化財保護に役立つことができれば幸いとするところであります。

最後になりましたが、本調査の実施および報告書作成にあたり御尽力をいただいた関係者各位に対し厚く御礼を申し上げます。

昭和59年 3 月

滋賀県教育委員会事務局

文化財保護課長

外 地 忠 雄

例 言

1. 本書は、守山市三宅町に所在する。県道山賀守山線単発工事に伴う遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県土木部道路計画課（草津土木事務所道路計画課）の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。
3. 現地調査および報告書作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師木戸雅寿が担当し指導した。
4. 現地調査、整理については、大橋信弥（文化財保護課技師）の協力を得たほか、落盛実、高山雅一、川端満、遠藤洋、井上誠、大西勲、奥村一彦、西村久史、山元幸彦、北岡学、北島昭宏、小林義幸の諸君が参加した。
5. 整理、報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課木戸雅寿が行ない辻峰子の協力を得た。

目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査の経過	2
III. 遺 構	
1. 柱穴群	3
2. 土 拵	5
3. 溝	5
IV. 遺 物	8
V. むすび	11

図版目次

- 図版 1 . (上) 南側トレンチ、SD-1、近景 (西より)
(下) 北側トレンチ、SD-2、近景 (西より)
- 図版 2 . (上) 南側トレンチ遺構全景 (北より)
(下) 南側トレンチ、柱穴群近景 (北より)
- 図版 3 . (上) 北側トレンチ、SK-1、近景 (北より)
(下) 北側トレンチ、SK-1 遺物出土状況、近景 (北より)
- 図版 4 . (上) SK-1、出土遺物 (完形)
(下) SK-1、出土遺物
- 図版 5 . (上) 第 1 包含層、出土遺物
(下) 第 2 包含層、出土遺物
- 図版 6 . (上) P-3、P-9、SD-2、出土遺物
- 図版 7 . 出土遺物実測図
- 図版 8 . 南側トレンチ、平面・断面実測図
- 図版 9 . 北側トレンチ、平面・断面実測図

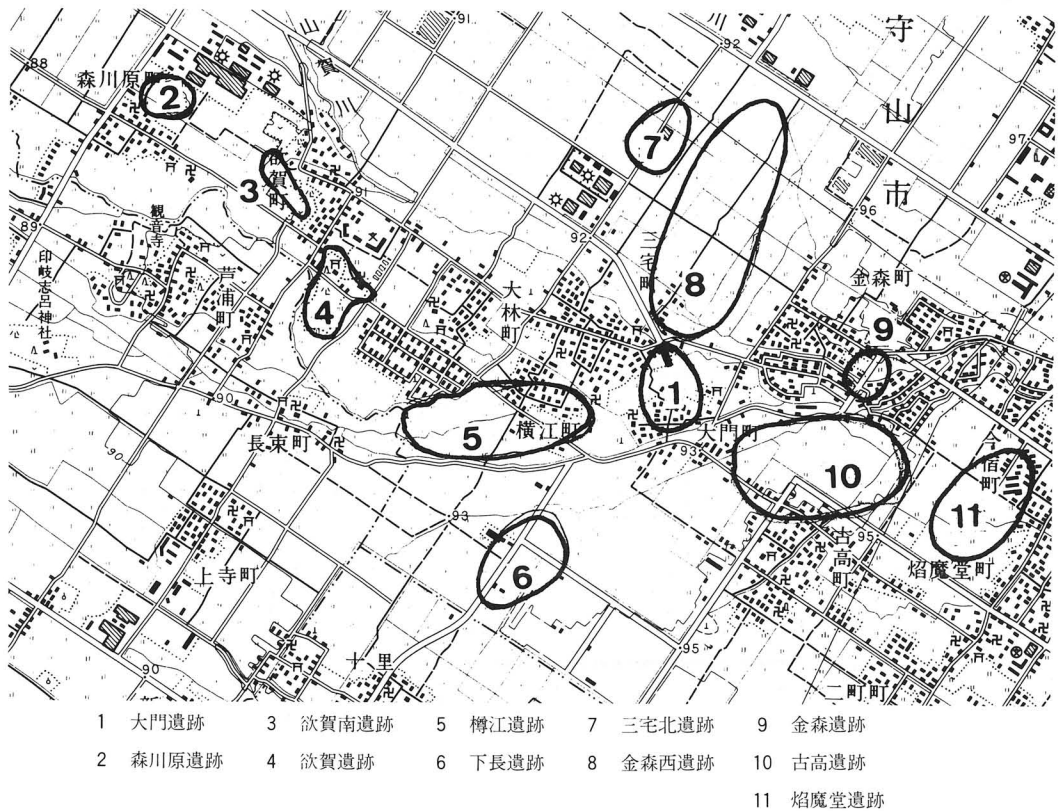
挿図目次

- 第 1 図 遺跡位置図…………… 1
- 第 2 図 トレンチ設定図…………… 2
- 第 3 図 P-3、P-9 出土遺物実測図…………… 4
- 第 4 図 SD-2 出土遺物実測図…………… 6
- 第 5 図 SD-1、SD-2 平面・断面実測図…………… 7

I 位置と環境

調査対象地域となった大門遺跡の所在する守山市大門町は、旧野洲郡と栗太郡との境界を流れる「境川」沿いに形成された自然堤防状微高地上に立地する。「境川」は古代野洲川の本流と言われるように、従来より周辺一帯に弥生時代～近世にかけての遺物が散布していることが周知されているところとなっており、現在でも川筋に相近接するように連鎖状に集落が存在している。大門町大門遺跡もそのような集落に周知されている遺跡の一部に他ならない。

今回調査を行なった地域は、三宅町と大門町にかけて広がっているとみられる遺跡の北端に位置し、現在流れている守山川のすぐ南側に位置する。現況は一部造成が行なわれているが、周辺部の水田、畑からみても一段低くなっており、もとは川岸に近い谷状地形を程していたものと思われる。



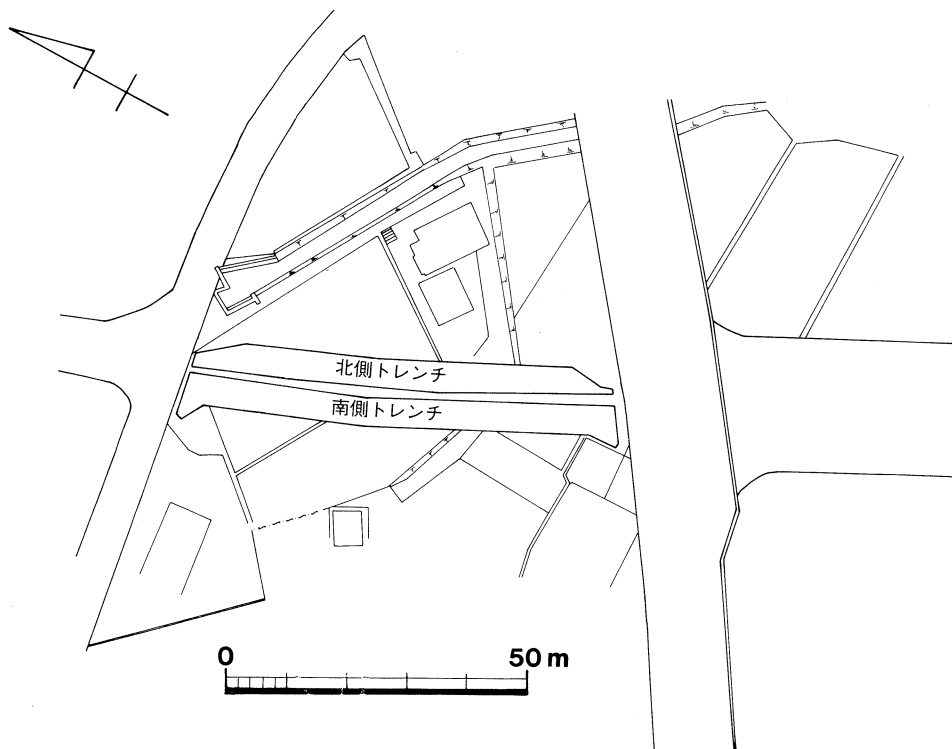
第1図 遺跡位置図

II 調査の経過

当調査は昭和58年4月25日より同年5月31日までのおよそ1ヶ月を要して実施した。トレンチは調査地区の東西両端が既設道によってはさまれ、南北に私有地が迫まっているため、掘削土の処理を考慮に入れて調査区を南北10m×東西75mに区切り、各々を北側トレンチ・南側トレンチと名称を設うけて、二調査区を設定した。

調査は南側トレンチより行ない鉄板をはかせたバックボウにより盛土・旧耕土・床土を除去した後、遺構面まで掘り下げた。

遺構は完掘ののち、写真撮影・図面化することにより記録するとともに、平板実測による地形測量によりその位置を明らかにし、全ての遺構を記録保存し、1m以下の遺構面においては、山ズリを充填して地下保存を行なった。



第2図 トレンチ設定図

Ⅲ 遺 構

1. 柱穴群

〈南側トレンチ〉

柱穴は全部で12個確認できたが、調査区が幅10mと狭く遺構がトレンチの南壁側をかすめたため、建物となるような関連した柱穴は認められなかった。

柱穴群は全てトレンチ東より伸びる微高地上の縁辺部に近いところで形成されていた。遺構面は現表土面より表土（暗茶灰褐色土）20cm、第2層（暗茶褐色砂土）20cmの直下であり、全ての遺構において深さが約20cm前後と考えられる。

以下に各々の柱穴において若干の説明を加えておく。

P-1 埋土・淡茶褐色砂土・長径22cm・短径40cmの掘方を持ち、径14cmの柱当がある。深さは約20cm。

P-2 埋土・茶褐色砂土・直径42cmの掘方を持ち中心よりやや北よりに10cmの柱当をもつ、深さは10cm程度である。

P-3 埋土・淡茶褐色砂土・直径34cmの掘方を持ち中心より南にずれた位置に径8cmの柱当をもつ、深さは約10cm。

P-4 埋土・淡茶灰色砂土・長径70cm以上、短径32cm、の涙形を程する。深さは約10cmあり、P-5によって切られている。

P-5 埋土・暗茶灰色砂土・直径40cm・深さ約10cm。

P-6 埋土・暗茶灰色砂土・長径108cm・短径50cmの中ぼそりの長円形を程する。深さは5～10cmで凹凸がはげしい。

P-7 埋土・暗茶灰色砂土・長径66cm・短径46cmの掘方を持ち、南側端に径26cmの柱当をもつ、深さは約23cm。

P-8 埋土・暗茶灰色砂土・長径92cm・短径54cmの長方形を程する。深さ約20cm。

P-9 埋土・淡茶灰色砂土・長径1m以上の涙形を程する掘方を持ち、中心より南よりに径20cmの柱当を持つ、P-8に切られている。

P-10 埋土・暗灰色粘質土・形は瓢箪形を程する。深さは20～30cm。

P-11 埋土・暗茶褐色土・径50cm・深さ約20cm、SK-1の上面から切り込んでいる。

P-12 埋土・暗茶褐色土、直径53cmの長円形を程す、深さ5cm、SK-1の肩を切り込む。

P-13 埋土・暗茶褐色土・径50cmの円形を程す、深さ5cm、SK-1の肩を切り込む。

P-14 埋土・暗茶褐色土・径32cmの円形を程す、深さ約10cmである。

〈北側トレンチ〉

北側トレンチにおいては、柱穴が13個検出できた。建物となるような組合せは確認することはできなかったが、いずれも建物の一部を形成する柱穴群であると思われる。

以下に各々の柱穴において若干の説明を加えておく。

P-1 埋土・暗茶褐色粘土・短径50cmの長円形の一部と思われる。深さは約10cmである。

P-2 埋土・暗茶褐色粘土・径14cm強の小さな柱穴で深さは7cm余である。

P-3 埋土・暗灰色粘質土、やや不整形を程し、2つの柱穴の切り合かと思われたが、確認することはできなかった。深さは約17cmである。

P-4 埋土・暗灰色粘質土・径22cmの柱穴で深さは約7cmである。

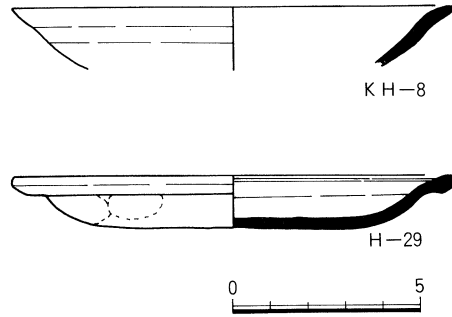
P-5 埋土・暗灰色粘質土・径18cmの柱穴で深さは約7cmである。

P-6 埋土・暗灰色粘質土・長径32cm、短径12cmの長円形で東側端に径8cmの長円形で東側端に径8cmの柱当りをもつ。深さは8cmである。

P-7 埋土・暗灰色粘質土・長径34cm・短径21cmの長円形の柱穴で深さは25cmある。

P-8 埋土・暗灰色粘質土、径20cmのほぼ正円形の柱穴である。

P-9 埋土・暗灰色粘土、88cm×162cmの隅丸方形のもので深さは約10cmである



第3図 P-3、P-9出土遺物実測図

が、P-10によって3分の1ほど切られている。

P-10 埋土・暗灰色粘質土、50cm×70cmの隅丸方形で深さ約10cmの柱穴である。

P-11 埋土・暗灰色粘質土、64cm×40cmの長円形を程し、西端に径20cmの柱当をもつ深さは約15cmある。SK-3の一部肩を切っている。

P-12 埋土・暗灰色粘質土、径20cmの円形の柱穴である。深さは20cmである。

P-13 埋土・暗灰色粘砂土、径26cmの円形の柱穴の半分である。

2. 土拵

〈南側トレンチ〉

南側トレンチにおいては土拵が2基出てきた。

SK-1 埋土・暗灰褐色土、一辺30cm以上の方形土拵の一部と思われるが、トレンチに一部がかかっているため明確ではなかった。深さは約15cm位である。

SK-3 埋土・灰色粘砂、浅く不整形の土拵である。SK-1とP-11によって切られる。

3. 溝

〈南側トレンチ〉

SD-1、南側トレンチの西端隅に位置する南側幅3m、北側幅1.2mの南北溝の一部であると思われる。埋土は2層から成っており、第1層は灰色泥土、第2層は青灰色粘泥砂で第2層中より、遺物の出土をみている。遺物は、混入と思われる微量の須恵器、土師器をのぞくと、瓦質瓦が数枚、瀬戸美濃天目碗片、古伊万里の染付・黄瀬戸の燈明皿が出土しており、遺構が水田構築前、大門遺跡以後に作られていることと考え合せても江戸時代中頃の溝であると思われる。

上の方角または長方形の土拵の一部と思われるが、性格・形状はトレンチに一部かかった状態で検出されたので明確にならなかった。深さは、深いところでも約15cm位である。

SK-2 埋土・淡緑灰色砂土、径1m30cmの円形を程し、深さは約50cmであるが、底は砂層に達しており、湧水の状況からみても素掘の井戸の残欠の可能性がある。

〈北側トレンチ〉

S K-1 埋土・暗灰粘質土、一辺2m40cm以上の方形または長方形の一部と思われるが、形状はトレンチの端にかかっているため明確にすることはできない。東側の肩はくずれ落ちた格好になっているが、南側の肩はほぼ直くに落ちている。なおこの土拵のみに大量の土師質土器が出土している。

完形の土師質土器（小皿）が三点、肩から落ちこんだ状態で出土している。

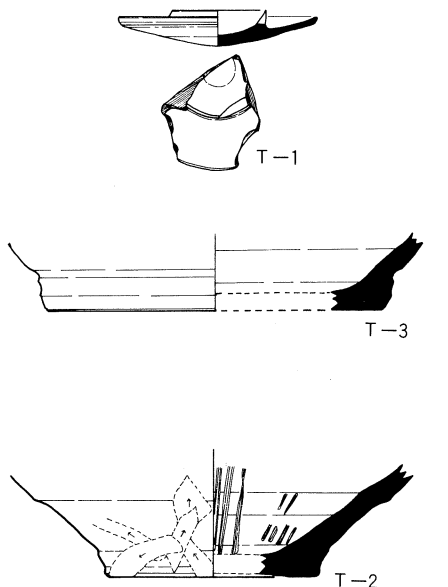
S K-2 埋土・暗灰粘砂(上層)、長径14cmの長円形を程し段掘りとなっている。

〈北側トレンチ〉

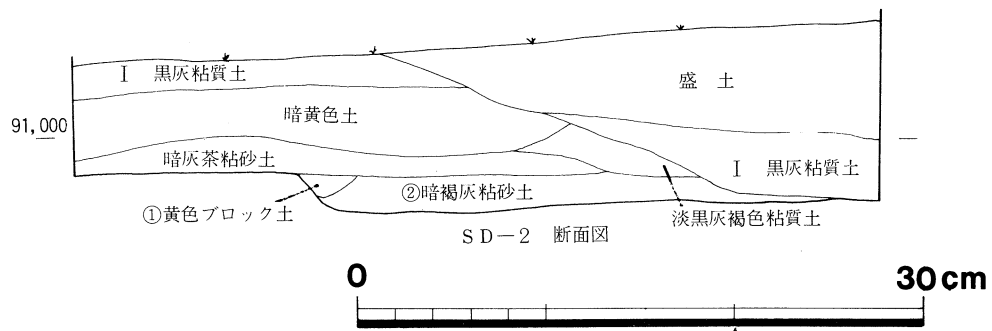
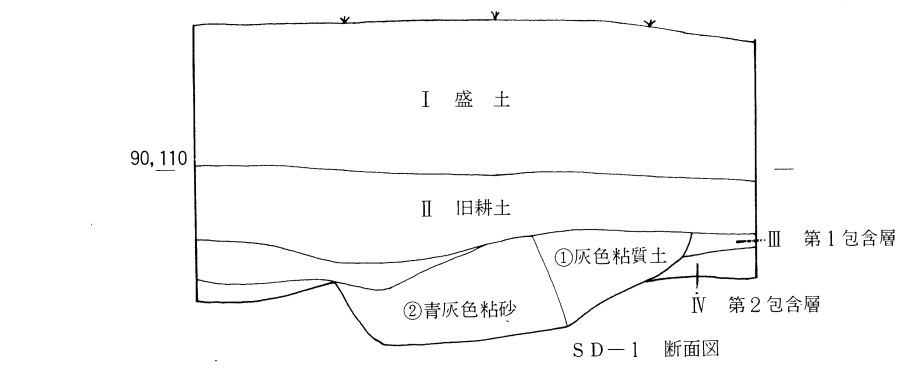
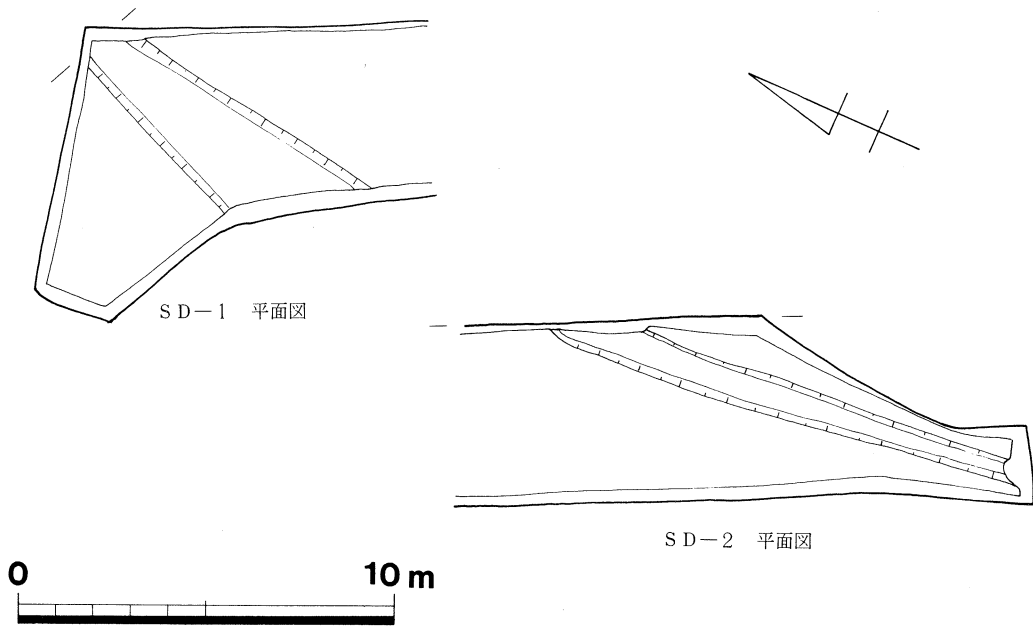
S D-2、北側トレンチの東端隅に位置する幅約80cmの北東溝で深さは約15cmと全体に浅い。埋土は暗褐灰粘砂土で大量のマンガンを含んでおり、底にマンガンの礫となり厚く堆積していた。

出土した遺物には、信楽焼の播鉢片・黄瀬戸の燈明皿片・土師質土器が少量あり、時期は南側トレンチ・S D-1 とほぼ同じ江戸時代中頃のものと思われる。

以上、二条の溝は近世の時期のものであり大門遺跡の中心となる時代のものではなく、その性格をすぐ答えることはできないが、今後、大門遺跡の性格を考える上で、中世期以降の集落の存り方としてとらえ直さなければならぬであろう。



第4図 S D-2 出土遺物実測図



第5図 SD-1, SD-2平面・断面実測図

IV 遺物

当遺跡からは中・近世の遺物が少量出土した。遺物の種類は、遺構・包含層中に土師質土器を中心に、黒色土師質土器（KH）・磁器（J）・陶器（T）が若干と他に少量の江戸期の瓦が見られた。

〔土師質土器〕

土師質土器の器種には、褐色系大皿と褐色系小皿がみられるが、近江の中世遺物の研究が立遅れているために、近隣遺跡との比較によって土器を述べることができない。当時中世都市であった京都が近くにあることにより、流通経済的・技術的影響を強く受けていたのではないかと思える。よってこのことから、これらの土器を⁽¹⁾京都（平安京左京五条三坊十五町の発掘調査）の成果に比較対応して述べていくことにする。

A 1 タイプ大皿（H-20）

口縁部を指でつまみ上げ外反させ、横ナデを入れる。端部に近づくほど、器壁が薄い。11世紀代に比定されている。

A 2 タイプ大皿（H-13・H-21）

広く平らな底部を持ち、口縁端部が三角形、又は四角くなり、肉厚が一定している。12世紀代に比定されている。

A 2 タイプ小皿（H-1・H-2・H-4・H-5・H-6・H-7・H-16）

口縁部を横ナデにより引きおこし、口縁端部が三角、又は四角くなっている。一様に広く平らな底部を持つ。13世紀代に比定されている。

A 3 タイプ小皿（H-12・H-17・H-23・H-24）

A 2 タイプから A 3 タイプに移行する過渡期の形態と思われ、やや粗雑で立ち上りに角度があり、角がつくように口縁部をつまみ上げる。14世紀初頭に比定されている。

B 1 タイプ小皿（H-25）

A 2 タイプに類似、やや大ぶりで口縁端部に軽い折り線が入る。底面積は広い。その他の皿（H-3・H-8・H-9・H-10・H-11・H-15・H-19・H-

22・H-26・H-27・H-28)

このタイプの皿は、だいたいにおいて手荒い作りをしており、焼成も甘く、胎土も荒い。型式は、平安京編年のいずれにも属さず、全てにおいて器壁肉薄で、指圧による成形のみで底部から口縁部に素直にひき上げた形を程しており、ナデを使わない。

中世期の時期をはずれることはないと思われるが、どのタイプの時期に属するかは明確ではない。これらの皿は、平安京皿類のいずれかのタイプの亜流か、近江特有の皿としての理解が可能であると思われる。

以上の土師質土器の年代観を整理してみると次のようになる。

出土遺物中、最古年代を示すものは、11世紀代のものがあり、最新段階のものには、14世紀初頭のもものが、包含層中に含まれていた。各型式の土器の絶体量から考えても、10世紀代以前の遺物が皆無であることから、11世紀後半あたりより大門遺跡に村落が定着し始め存続していったと考えられる。なお今回検出され、若干の土師皿を出土した丘陵下の遺構（SK-1）は、12世紀末～13世紀中頃の年代を示しており、13世紀の中頃以降には廃絶されたものであることがいえる。

なお、これらの年代観は、あくまでも平安京の土師質土器の型式のみに留意し、比較した結果であり、平安京のものよりも、はるかに成形や形状的におとる粗雑な土師皿をみるに、技術的・様式的影響は大分に考えられ、平安京と近江との間にどれ位の年代差が考えられるかということは、流通経済が発達し職人層が成立しているこの時代を考慮して、今後、検証していかなければならないところであろう。

〔近江系黒色土器碗〕

近江系黒色土器碗は土師質土器よりもはるかにその出土個体数が少なく全体の約5分の1位になっている。中でも図化できたものをその時期的特徴を示す口縁部の立ち上りから口縁端部の形状より分類すると次のようになる。

KH-1・3・4

体部よりやや内湾するように立ち上がった口縁部一段のヨコナデによりやや外反させるようにつまみだす。

KH-2

体部よりやや内湾するようにつまみ上げられた口縁に強い一段のヨコナデを加え、強く口縁端部を外反させられる。内面口縁端部に一条の沈線を施す。

KH-5・6・7

体部より、鋭く直くに立ち上らず口縁端部を丸くおさめる。

H-1・H-2タイプはいずれも、畿内瓦器編年の基である白石編年でいうⅡ-3類（12世紀末～13世紀初頭）のものと思われる。

H-5タイプは上記のものより後出するものと思われる。

〔磁器〕

磁器は第2包含層中より、白磁が三点出土している。いずれも口縁部を玉縁状に折り返す。⁽²⁾太宰府・Ⅱ-1（J-3）・Ⅳ-1-6（J-1・2）型式に層するものであり、時期は11世紀中頃～12世紀に比定されているものである。しかしながら、この年代はあくまで太宰府編年であり、特に当遺跡のように中世農村集落址と思える所では、輸入陶磁器は貴重品であったろうと思われ、13世紀代以降に食い込む可能性が多分にあり、やや太宰府よりは広い年代観になるであろう。

〔その他の遺物〕

その他の遺物として、図化できなかったが数点の土師釜片・須恵器片が出土しているが、同時代のものとして考えてよいものである。

近世代の遺物としては、SP-1・SP-2より前述（Ⅲ-3）のとうりの遺物が出土した。

V むすび

最後に今回調査した大門遺跡の調査結果を簡単に述べてむすびとしたい。

大門遺跡は今回の調査も含めて、これで大きくみて3ヶ所の調査が成されたことになる。以前の2調査の成果をまずここで踏まえると以下ようになる。

⁽³⁾第一調査は大門町西端でおこなわれ、上層で鎌倉後期～室町初頭期にかけての集落跡を、下層で弥生後期末葉の遺構が検出された。

⁽⁴⁾第二調査では大門町東端において、上層で11世紀代～12世紀後半の土器を含む遺構が、下層の溝や土壌で弥生時代後期中葉の土器を含む遺構が検出された。

第一調査と第二調査との間の遺跡の年代差は、第二調査の報告で述べられているとうり精密な土器検証を行なった結果の修正すべき点を指適されての判断である。

今回調査を行なった大門町西北端、分布図域の北端にあたる部分では、トレンチ東端より20m西のあたりで東側から広く伸びてきている微高地状台地上で、中世の遺跡が、それをさらに下にさがった低地上に、SK-1を含む遺構群が確認できた。今回の調査では、前回の調査によってみられた弥生期の遺構は検出されなかった。おそらくこの弥生時代の集落址は、今回の調査で検出できた微高地状台地上に形成されているものと思われ、今回のトレンチがその微高地の縁辺部をかすめる形になっている為に検出されなかったものと思われる。

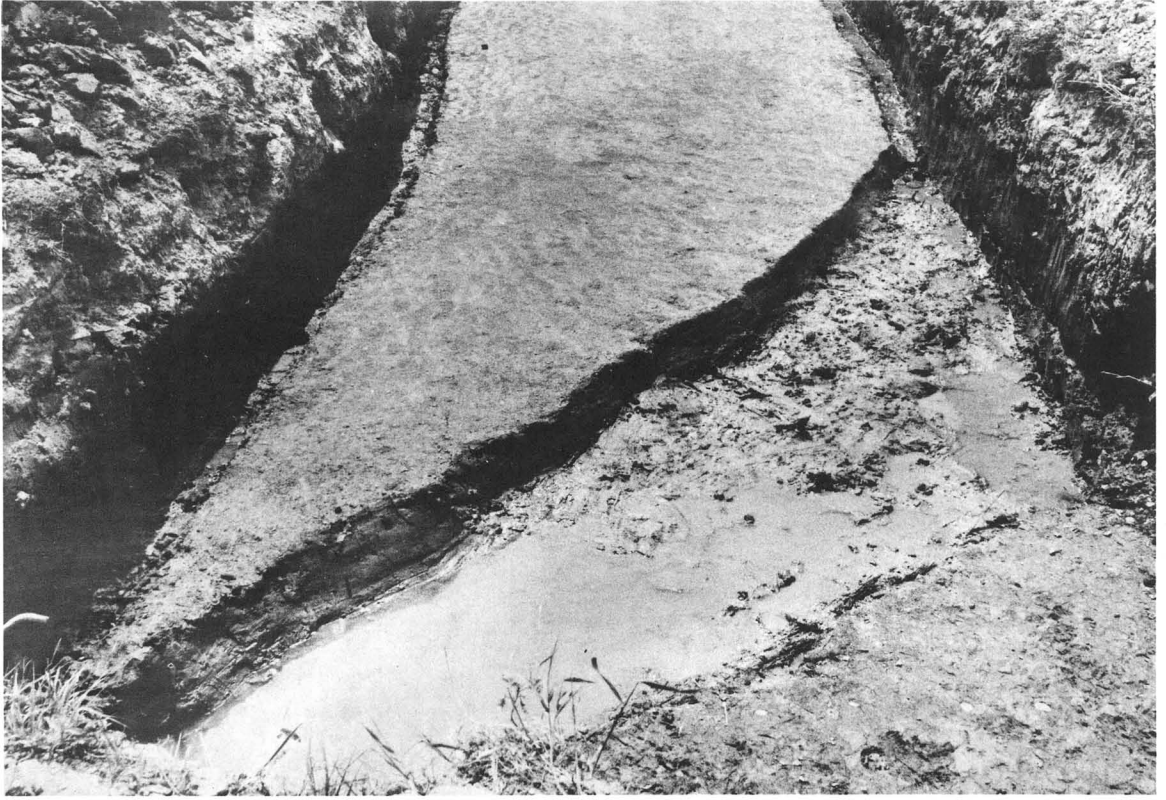
周知されている大門遺跡の今回発掘部分では、二ヶ所の遺構群が検出されているが、微高地上の遺構からは柱穴より、11世紀末～14世紀初頭までの年代を示す遺物が出ており、また、微高地から降りた低地の遺構群では前述の(Ⅳ)通り、12世紀末～13世紀初頭の年代を示す土器を含む遺構が検出されている。両遺構の上限と下限をとると11世紀末～14世紀初頭という集落址の年代の幅が考えられ、包含層中の遺物の年代はここで全ておさえられる。しかしながら微高地上の遺構群と低地の遺構群が同遺跡の範囲としてとらえてよいかどうかということは、すぐ横の守山川対岸で金ヶ森西遺跡が伸びてきていることを考えるならば、今後の問題を残すところとなるであろう。

なお今回の2枚の包含層堆積は、2度による大きな雨水による氾濫堆積の様子を程しているものと思えた。

註

- (1) 横田洋三 「平安京左京五条三坊十五町の発掘調査」 1981
- (2) 森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」 『九州歴史資料館研究論集4』 1978
- (3) 大橋信弥 『湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－大門遺跡－』 滋賀県教育委員会 1978
- (4) 山崎秀二 『守山市文化財調査報告書』(第10冊) 守山市教育委員会
1981

版 图



1 南側トレンチ SD-1 近景 (より)



2 北側トレンチ SD-2 近景 (西より)



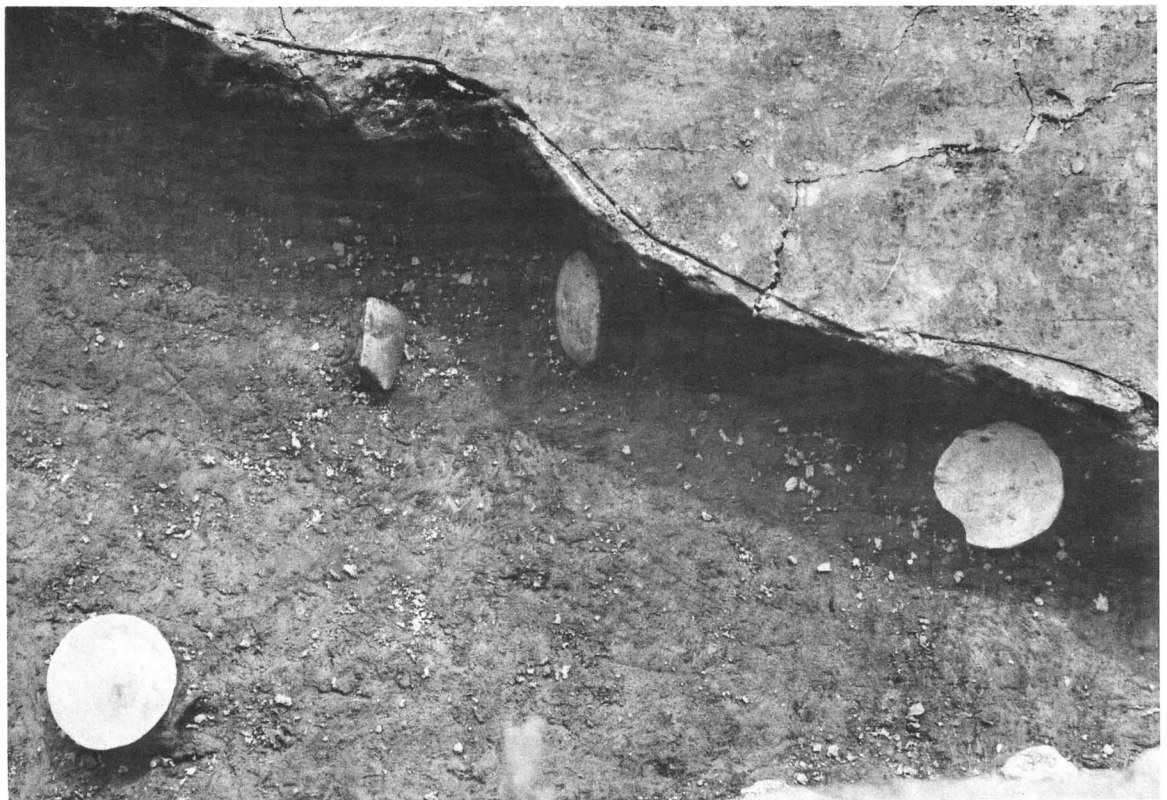
1 南側トレンチ遺構全景（北より）



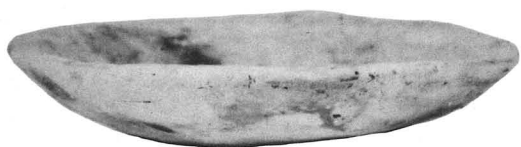
2 南側トレンチ 柱穴群近景（北より）



1 北側トレンチ SK-1 近景 (北より)



2 北側トレンチ SK-1 遺物出土状況 近景 (北より)



H-2



H-11

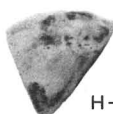


H-3

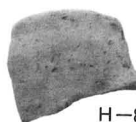
1 SK-1 出土遺物 (完形)



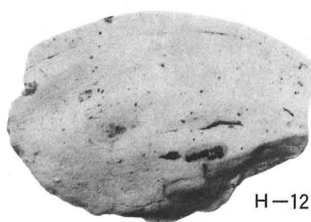
H-1



H-4



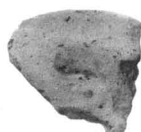
H-8



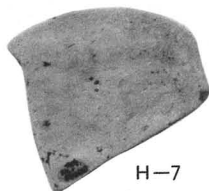
H-12



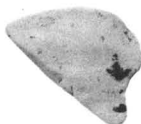
H-5



H-9



H-7



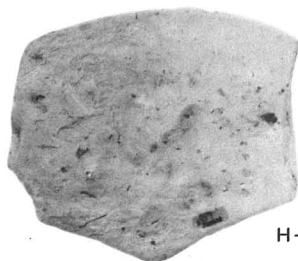
H-6



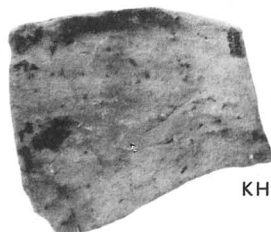
H-10



KH-1



H-13

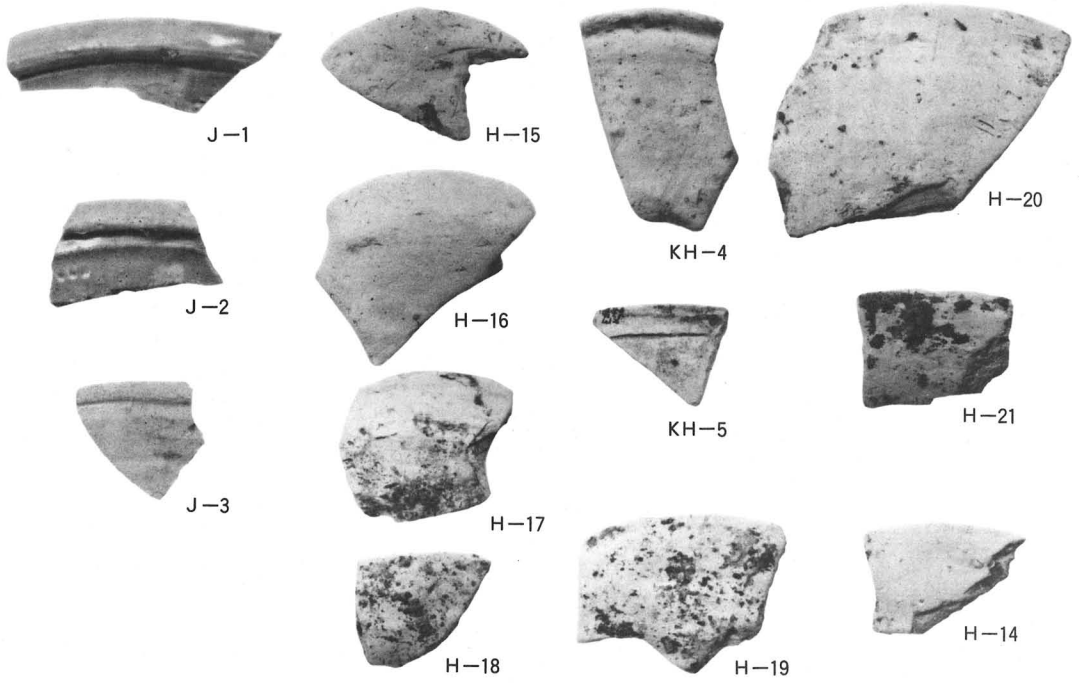


KH-3

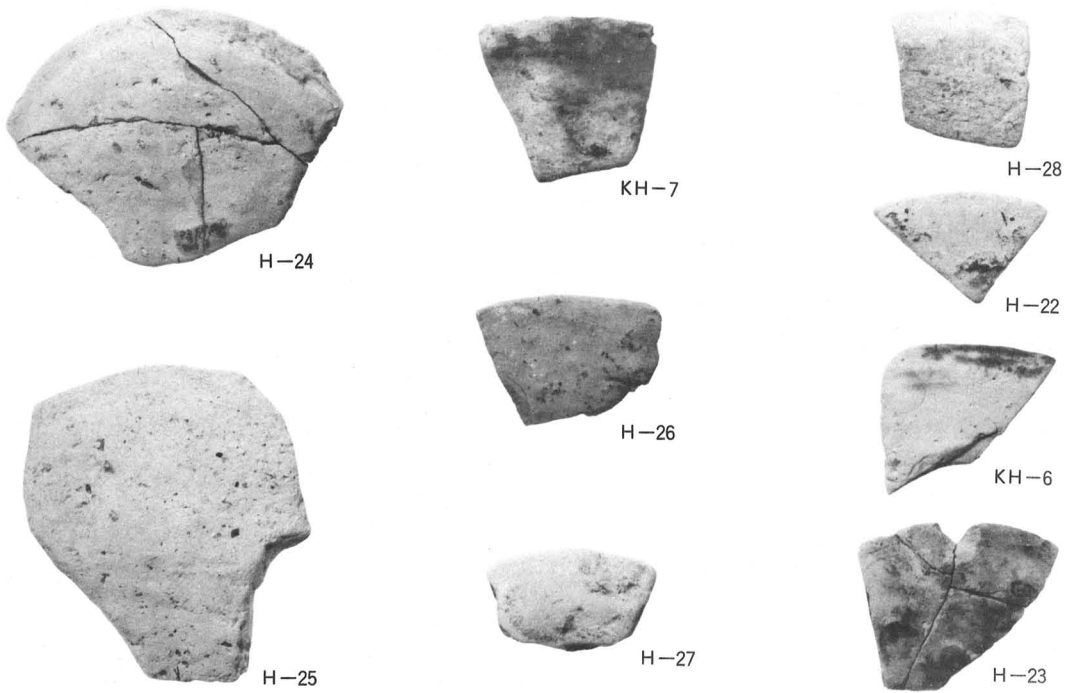


KH-2

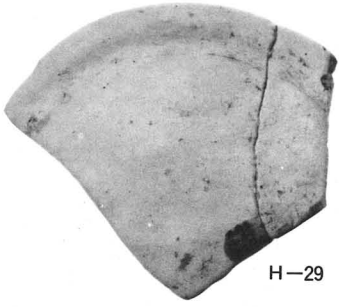
2 SK-1 出土遺物



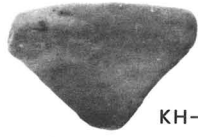
1 第1包含層 出土遺物



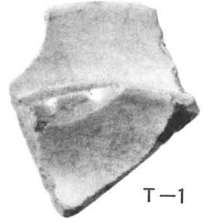
2 第2包含層 出土遺物



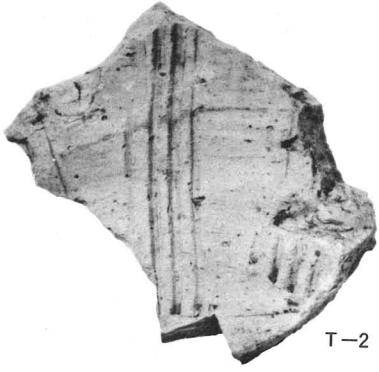
H-29



KH-8



T-1

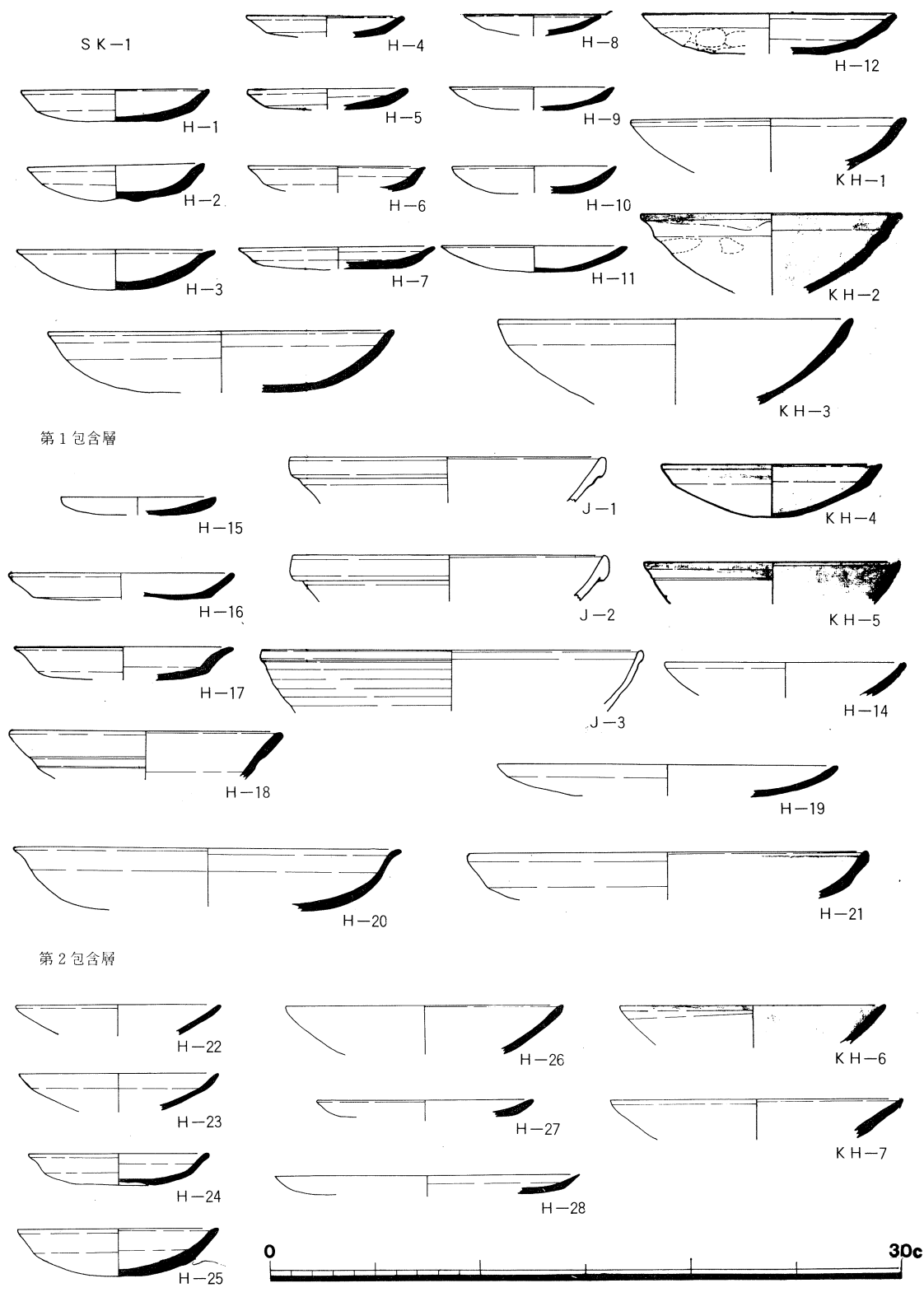


T-2

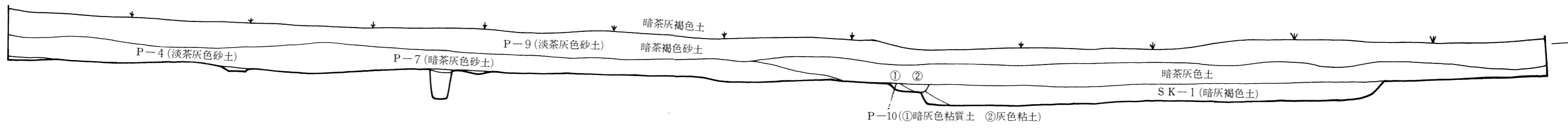
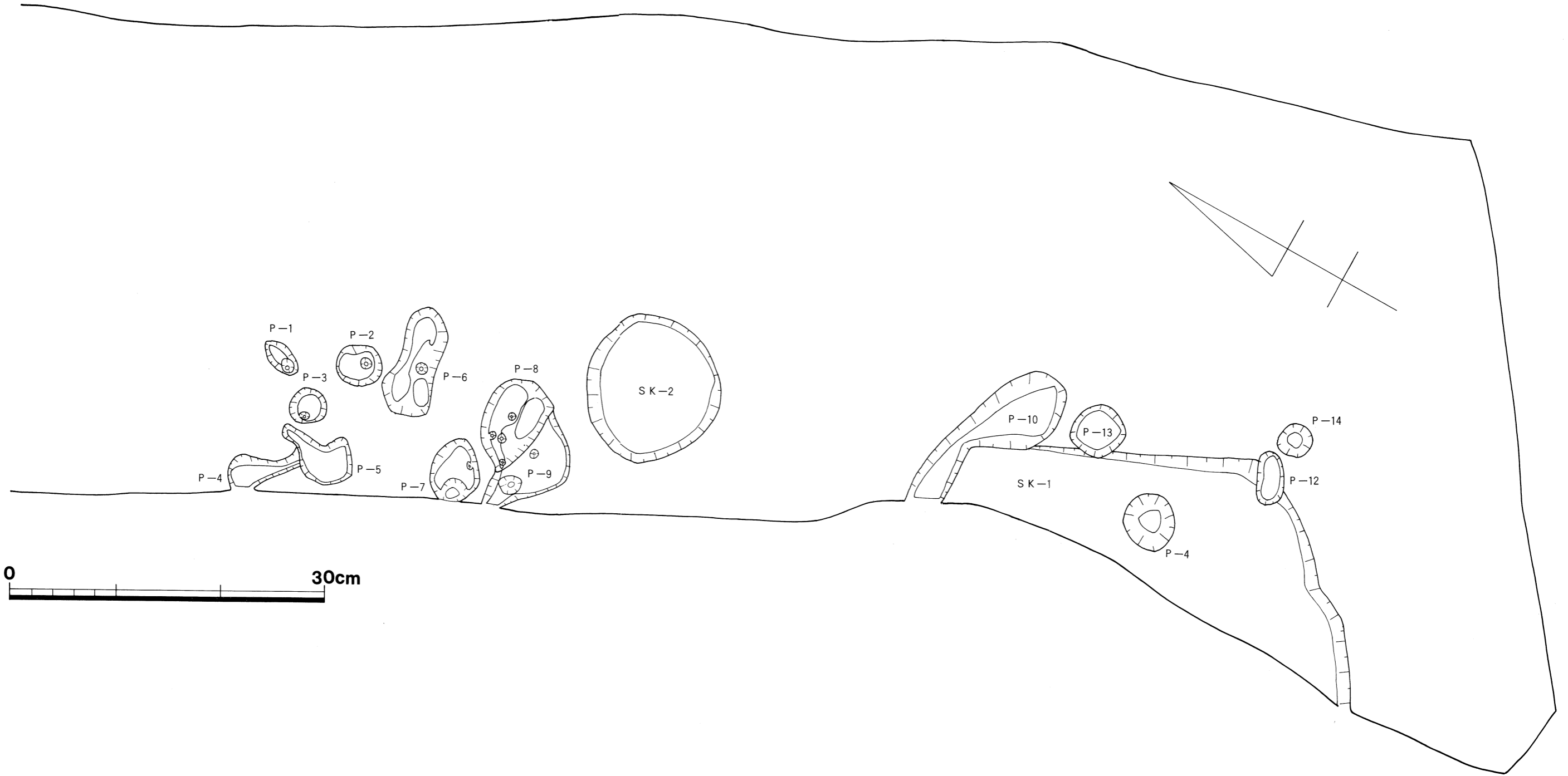


T-3

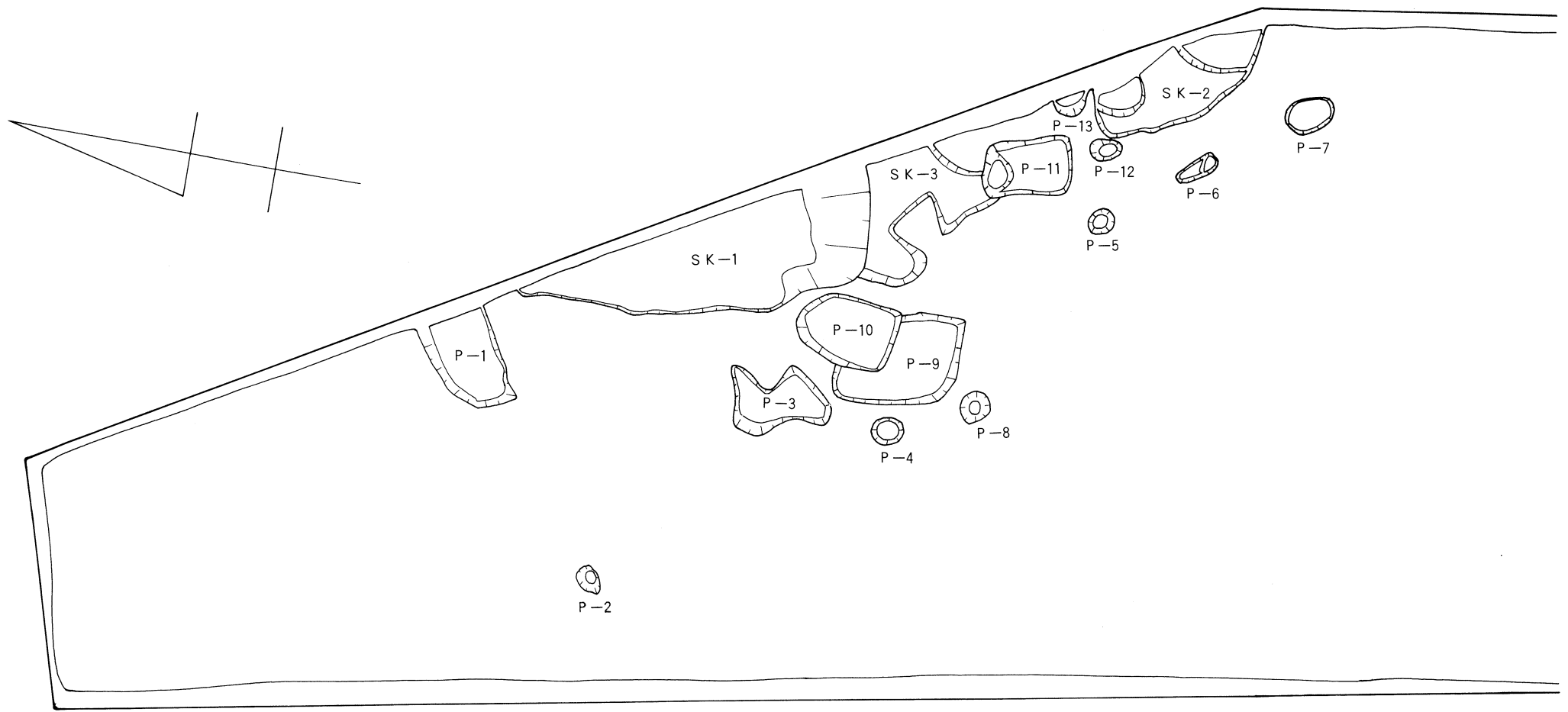
P-3、P-9、SD-2 出土遺物



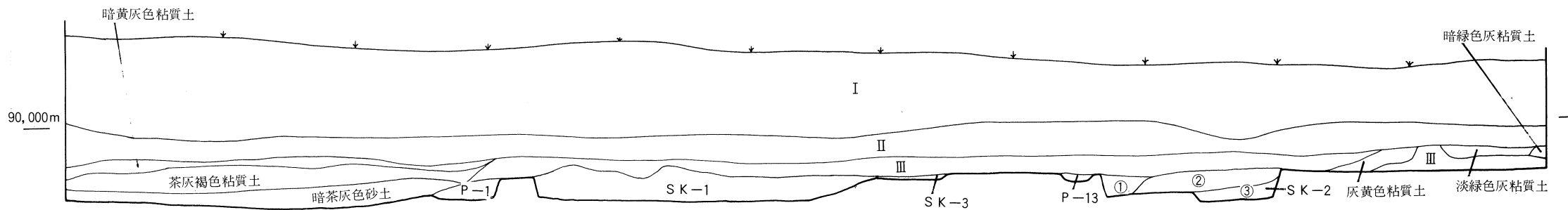
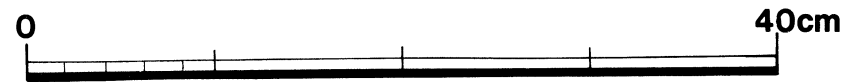
出土遺物実測図



南側トレンチ 平面・断面実測図



- | | |
|-------------------|----------------------------|
| I 造成盛土 | SK-1 (暗灰色粘質土) |
| II 旧耕土(黒灰土) | SK-2 (①灰色粘砂 ②暗灰色粘砂 ③灰褐色細砂) |
| III 第2包含層(黄灰色粘質土) | SK-3 (灰色粘砂) |
| | P-1 (暗茶褐色粘土) |
| | P-13 (暗灰色粘砂土) |



北側トレンチ 平面・断面実測図

県道山賀一守山甲線単発工事に伴う
遺跡発掘調査報告書
—— 大門遺跡 ——

昭和58年3月

編集 滋賀県教育委員会
滋賀県教育委員会
発行 (財)滋賀県文化財保護協会
印刷 有限会社 真陽社
